

ウィリアム・ウィリスの門下生たち

森 重 孝

元鹿児島市立病院小児科部長・副院長 医学博士

Disciples under William Willis, M. D. in Kagoshima

Shigetaka MORI, M. D.

Past Vice Director, Kagoshima City Hospital, Kagoshima

幕末から明治初期にかけて、英医ウィリアム・ウィリスは、多くの鹿児島の医師たちに西洋医術を指導し、英国医学を懇切丁寧に教えた。後世、門下生のなかから著明な医人たちが輩出したことから、ウィリスは鹿児島の医学発展向上のための大恩人であると言えよう。

彼は1859年にエジンバラ大学を卒えて翌年5月から1年半の間ロンドンのミッドルセックス病院で医員として働き、1861年（文久1年）11月16日に日本の江戸駐在英国公使館の補助官兼医官としての発令を受け、翌年5月12日（文久2年4月14日）に長崎へ着いた。当時、彼は25歳の青年医師であった。その年の8月21日（西暦9月14日）に生麦事件が起り、彼は最先に現場にかけつけて、医師として、また公使館員としての職責を果たした。

ついで文久3年7月（西暦1863年8月）の鹿児島湾での薩英戦争では、ウィリスは通訳官アーネスト・サトーらとともに英国軍艦「アーガス」号に乗って参加した。この戦争によって泰西文明の威力を知った薩摩は、英国と和睦協定を結んで、薩摩藩と英国との間には親密な関係が築き上げられた。

慶応4年1月3日（1868年1月27日）に京都郊外鳥羽伏見において幕府の軍隊と薩摩長州両藩兵を主力とする新政府軍とが撃突した時、多数の負傷兵を処置してもらうために薩摩藩は英国公使パークスに医師の派遣を依頼した。当時神戸港に碇泊中の英国軍艦に乗り込んでいたウィリスが指名されて通訳官サトーと共に京都伏見区の相国寺内養源院に設けられていた薩摩軍陣病院に行き、院長新宮拙蔵、藩医石神良策、河村豊洲、上村泉三、山下弘平らを助手として10日間多くの負傷兵たちの外科的処置に没頭し、薩摩藩医たちを指導した。

新政府軍は、幕府軍を追討して、江戸・東北・越後へと進んだ。続出する傷病者を救助するために新政府軍は4月17日に横浜に臨時軍陣病院を設け、ウィリスと同じ公使館所属の医師シッダールとともに薩摩医・有馬意運、石神良策らと

年表 主としてウィリアム・ウィリス関係

西暦 月 日	日本 年 月 日	事件、行事など
1837. 5. 1.	天保 8.	ウィリス誕生
1862. 5. 12.	文久 2. 4. 14.	ウィリス長崎に着く
6. 初旬	5. 初旬	ウィリス横浜に着く
9. 14.	8. 21.	生麦村の事変
1863. 8. 12.	文久 3. 7. 2.	薩英戦争
1868. 1. 27-29.	慶応 4. 1. 3- 5.	鳥羽・伏見の戦い
2. 18.	1. 27.	ウィリス京都の薩摩臨時軍病院に出張診療
6. 3.	4. 13.	ウィリス横浜軍陣病院へ転勤
9. 3.	7. 17.	江戸を東京と改称
9. 6.	7. 20.	東京に「大病院」を開設
10. 23.	明治 1. 9. 8.	明治と改元
10. 5-12. 28.	8. 20-11. 21.	ウィリス北越戦線軍病院に出動
1869. 3. 2.	明治 2. 1. 20.	ウィリス東京医学校兼大病院長
3. 8.	2. 1. 26.	政府はドイツ医学導入の端緒を開く
1870. 1. 4.	2. 12. 3.	ウィリス鹿児島へ赴任約定
1. 8.	2. 12. 7.	ウィリス横浜出港
1. 13.	2. 12. 12.	ウィリス鹿児島に着く
5. 20.	明治 3. 4. 20.	鹿児島医学校兼病院開設
1871. 9. 19.	明治 4. 8. 5.	藩庁知政所を鹿児島県庁と改称
1973. 1. 1.	明治 5. 12. 3.	新暦明治6年1月1日となる

天朝病院の医師たち

ウィリスが巡回した病院は主に薩藩病院であったが、薩藩の兵士ばかりでなく、他藩の負傷者、幕府脱走兵、会津藩の兵士たちも差別せずに治療したので、天朝病院と呼んで、朝廷から下賜された菊花御紋章入りの病院旗を掲げていた。

これらの天朝病院には、当時の刀主（とうしゅ 医術）界の泰斗、佐藤舜海、佐藤進（舜海の養嗣子）、岡玄庵らが応援し、この外にも薩藩出身の医師たち二十余名が治療に当たった。足立慎悟、有馬意運、池上貞斎、石神良策、上村泉三、神田玄淳、黒木良哉、河野元橋、児玉剛造、是枝愛仙、実吉安純、新宮拙蔵、白尾貞斎、末野嘉仙、高木兼寛、鳥丸蘇元、中島宜治、成田幸斎、浜田元悦、浜田瑞庵、平川玄斎、前田杏斎（信輔）、山口元安、山下弘平、山本尚綱、湯之前精一郎、柳田意哉らがいた。



ウィリアム・ウィリス
来日の際（文久2年）25才

ともに上、下肢切断手術などで多忙を極めた。

同年7月20日（陽暦9月6日）に東京の下ヶ谷藤堂邸跡に病院を開設し、「大病院」とし、横浜軍陣病院の患者を次々に転院させることにした。

ウィリスは、その年の8月15日（陽暦10月5日）に護衛兵20名に守られながら越後戦線に向って出動した。前線では常に2人の医師（その1人は薩藩医上村泉三）を従えていた。

ウィリスの手記によると、「私自身は600名の治療に当り、他の1,000名の負傷者の処置法については前戦病院の医師たちに指導した。

負傷者中900名は政府軍の将兵、700名は会津藩兵たちであった。指から上、下肢の切断手術を38回もやった」と記している。

彼は明治元年11月22日（陽暦12月29日）に東京の大病院に復帰した。

明治2年1月20日（1869年3月2日）に彼は大病院々長に任ぜられた。同年2月には大病院は医学校兼病院と改稱された。これより先、同年1月22日、新政府は佐賀藩の相良知安と福井藩の岩佐純とを医学取調御用掛に任命し、相良は医学校を、岩佐は病院の運営をそれぞれ主に担当した。2人とも日本の医学の範を将来はドイツ医学にとりたい意向を持ち、大学南校教頭のフルベッキに相談したところ、合意を得て、明治政府はプロシア公使に対し外科医と内科医の派遣を要請したといわれる。そうすると、ウィリスの進退問題に悩んだ相良知安は、西郷隆盛に相談したところ西郷は快諾してくれて、時の内務卿大久保利通と相談のうえ薩摩へ迎えることになった。

1869年12月1日（明治2年10月28日）、ウィリスの薩摩藩との契約は、イギリス側から通訳官アストンが、薩摩側から東京在住の同藩公用人である内田仲之助・田中清之進がそれぞれ立合人となって行なわれた。雇用期間4年、給料は1ヵ月900ドル。

この契約を受諾すると同時に、ウィリスは1869年12月18日（明治2年11月16日）付で公使館員としての辞職届を提出した。薩藩知政所は明治2年12月3日（1870年1月4日）付で「ウィリス雇用の件」を発令し、ウィリスは元東京大病院頭取石神良策、軍医林ト庵とともに12月7日に横浜港を出て、12月12日（1870年1月13日）に鹿児島浄光明寺内の西洋医学校へ到着した。

明治3年正月、知政所は西洋医学校を鹿児島医学校兼病院という名称に改めた。そして医学校の教官の辞令を交付したり、上町の滑川の沿岸にあった豪商加藤平八郎邸にあった煉瓦作りの倉庫（慶応2年英国人技師たちが建設したもの）

明治2年(1869)

英医師

〔William Willis〕

ウリス

一
右御雇入之儀、石神良策へ被仰含趣有之、同心を以
内談為致候テ、猶又私共ウリス宅へ差越談判仕候処、
年限二ヶ年にては迎も医術相開候見当も無之、勿論当
人罷出候詮も無之事故、四ヶ年御雇入被下候ハ、御
受可仕、尤四ヶ年勉強いたし、医術開切不致節は、当
人ノ罪ニ候旨申出、月給之儀も八百五十弗ツ、にて受
合無之、精々九百弗ツ、之処にて、別紙条約書之通決
定相成候付、外務省御免許之上、今日良策同伴御当府
差立申候、委細ハ良策より可申上候、

ウリス門人

林 卜庵

右同伴いたし度、尤ウリス随従之旨承届候得共、猶於
其許着之上、御構等之儀可願出も難計、其篇之儀ハ良
策へも申含置候間、時宜次第御取計有御座度儀と奉存
候、
洋銀貳千七百弗、三ヶ月給料として相渡置申候、金千
両路用として同断、
右之通御座候間、別紙約条書相添、此段申上越候、
以上、

巳十二月三日

田中清之進
内田伸之助

知政所

右者医学校御用掛兼病院掛被成御願度思召候間
此旨申達候

明治三年正月

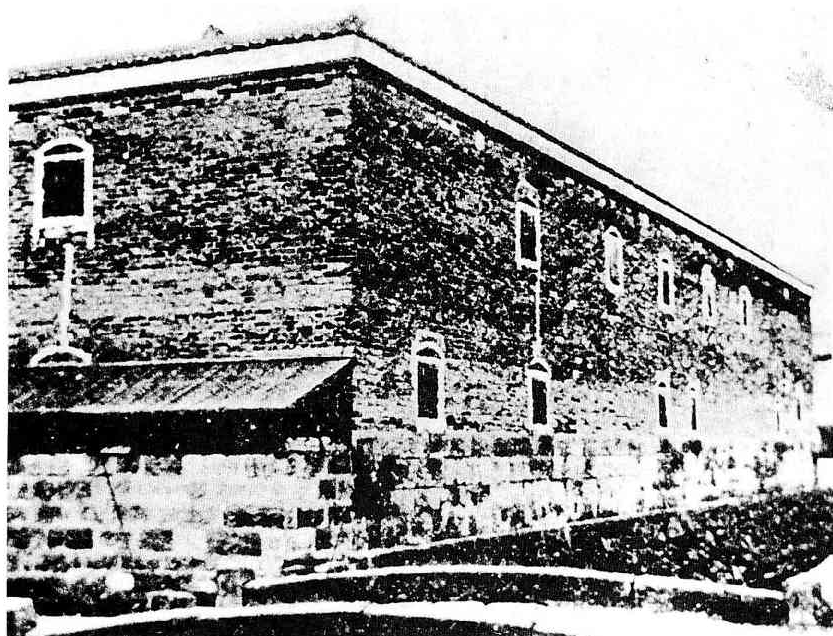
知政所

石神 良策
足立 慎悟
山下 弘平

右者医学校御用掛兼病院掛被仰付候条可申渡候

明治三年正月

知政所



赤倉病院 鹿児島・小川町滑川沿い

ウィリアム・ウィリス
明治3年(1871) 34才ごろ

を病院に改装し、患者約30人を収容できた。人々は「赤倉病院」と呼んでいた。その後、医学校での講義と病院での診療指導とを平行して行うために医学校を赤倉病院に近い都城屋敷に移した。

明治3年4月20日(西暦1871年5月20日)に鹿児島医学校兼病院の開講、開院の運びに至った。ウィリスは満34才になったばかりのときであった。

鹿児島医学校は本科と別科とに分かれていて、本科(原語科)は4年間で、正科として英語を教え、原書によって講義した。別科(訳語科)は2年間で、多くは医家の子弟に実地研修、調剤などを教え、高木兼寛・三田村忠国・加賀美光賢らが指導していた。

明治政府は明治4年7月14日に「廃藩置県」の令を発したが、その令状が飛脚で薩藩知政所に届いたのは8月3日であったので、同年8月5日に薩藩知政所を鹿児島県庁と改稱した。したがって、その後は鹿児島県医学校・付属病院と呼ぶことになった。

明治5年12月3日に日本は陽暦を採用することになり、この日を明治6年1月1日と定めた。

明治四年八月五日、薩藩置県ノ令ヲ示シ、人民ヲ訓戒セリ、
別紙七通ノ通從
朝廷被 仰渡趣、
從四位様於東京被遊 御承知候段御到來候、依之
從四位様
從三位様弥
朝意御遵奉之御事候条、一同心得違無之、尚再度何分
被、仰渡迄之間、士農工商百般之役職是迄之通勉勤可
罷在候、此段別て達候条、不洩様向々江可申渡候、
辛未八月五日 知政所

(記)
七月十四日、薩藩置県ノ發令アリシハ、夙ニ伝聞アリ
シモ、本月三日ニ至リ飛脚到達シタリ、仍テ本日發布
アリシナリ、
(按) 別紙七通トハ、薩藩ノ詔勅、忠義公ニ賜リタル勅
書、薩藩置県ノ達、薩藩後ハ參事ニテ執務スベキノ達
文、県治ノ規定ヲ發スル迄、庶務ハ參事之ヲ処決シ、
大事ハ申請スヘシトノ達文、藩知事免官辭令、県名伺
書ノ七通ヲ指スナラン、



明治八年一月
ウィリスと門下生たち

永田 利紀	重信 伝蔵	武井 順介	斜木 武三	木通 雲洞	宇都宮慎悟	鹿島甚左衛門
加藤 信輔	森山 恕助	手塚 盛徳	黒木 元俊	中俣 健吉	石踊才之丞	村田 直治
三田村敏行		坂元 常彦	ウィリス	三田村 一		上村 剛介

ウィリスは明治 8 年 (1875) 1 月までに満 5 年間鹿児島の医学校に勤務したので、同年 3 月から 1 年間の休暇をとり、帰国することにした。帰国前の記念写真が残されている。

ウィリスは帰国直前に大山県令に対して、「今日まで当病院の処方箋は外来・入院患者には 1 万 5 千にのぼり、往診で治療を施した在宅患者数は数千名に及んでいる。現在病院は満床で、医学校ならびに病院に出席する学生は 150 名である」と報告していた。

明治 9 年 (1876) 4 月に英国から鹿児島に戻ってきたウィリスは、赤倉病院の近くに、2 階 4 部屋、1 階 6 部屋の住宅を建築して明治 4 年 (1871) に薩摩藩士江夏十郎の娘八重 (当時 21 才) と結婚し、明治 6 年 (1873) に生まれたアル

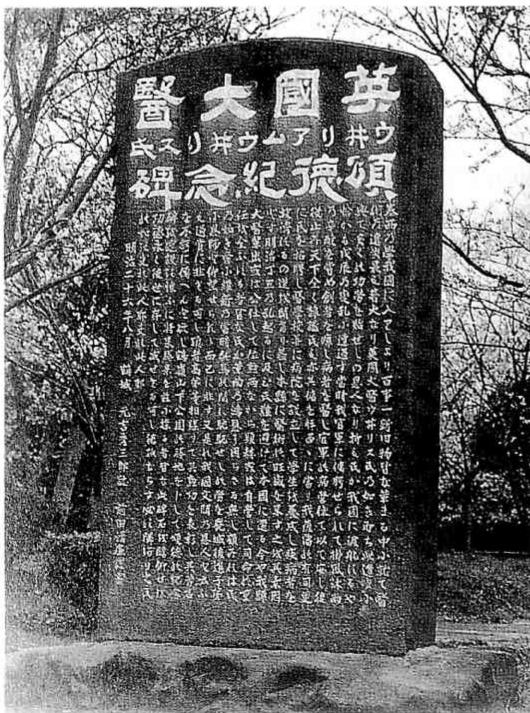
パート、横浜から連れてきたジョージ（11才）、召し使いの男1人（16才）、女2人（30才と24才）合せて7名が楽しく生活していた。

ウィリスは、明治10年1月27日に鹿児島病院長三田村一を同伴して鹿児島を出て、陸路50マイルの道を歩いて宮崎に至り、宮崎支病院に出張診療をやっていたが、鹿児島では陸軍火薬庫襲撃事件など不穏な事件が続発しているとの報らせがあつて、ウィリスらは急遽して鹿児島へ帰った。

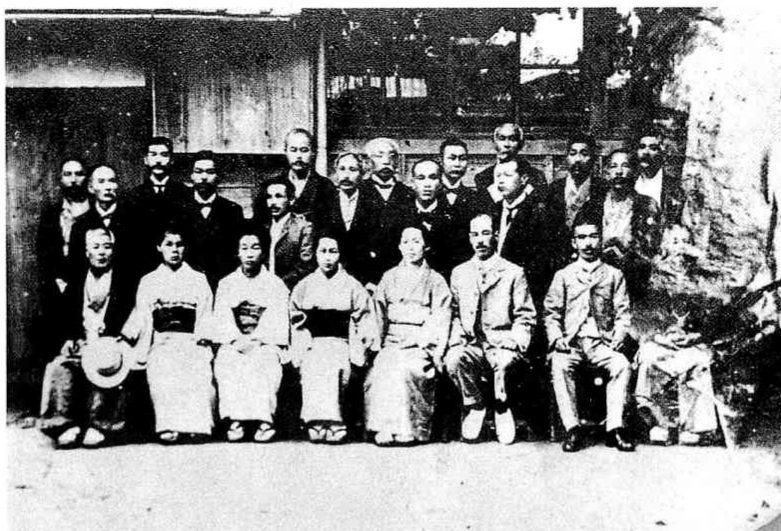
明治10年（1877）2月14日、朝から大雪の中を西郷軍の第6・7連合大隊が先発隊として加治木を出発、大臼に向かった。第6番大隊には15名の医師を含む救護班が従軍していた。その中にウィリスの門下生だった武井順介、国生喜介、



ウィリアム・ウィリス頌徳碑除幕式
明治26年8月、鹿児島市城山・東側登り口
前より4列目・左より4、中山晋平、6、鳥丸一郎
最前列・左より1、上村泉三、3、東 清輝、
4、高木兼寛、4、実吉安純



ウィリス頌徳碑（鹿児島大学医学部）



江夏八重・アルバート歓迎会
明治四十年八月十四日
鹿児島市田ノ浦、風景楼にて

熊谷 正助	肥後宗一郎	田崎正太郎	永田 利紀	中山 晋平	手塚 盛徳	坂元 東	税所 栄助
鳥丸 一郎	上田 義高	中尾 東陽	桑原 次郎	森山 昌則	東 清輝	田上 義順	山下 宗伯
黒木 元俊	東 夫人	森山 夫人	中山 夫人	江夏 八重	アルバート	市来（通訳）	上村 泉三

岩満藤太、田上早苗、川北厚蔵、内藤泰介らがいた。2月15、16日にかけて西郷軍1万5千人が熊本に向って進軍した。

2月24日付、イギリス長崎領事マークス・フラワーズより鹿児島から退去勧告書を受け取ったウィリスは、3月13日に興隆丸に乗船して1家7人長崎へ向かって鹿児島港を出た。

3月22日、ウィリスは单身横浜に出て、東京で家族7人が住めるような家を探していたが、5月中旬になって東京芝の山下通りの家が見つかり、長崎から家族を呼んだ。5月28日には外務省から給料と宿泊費を支給され、また7月12日には財産損害額2,747ドルを受け取った。8月になって单身帰国の汽船に乗り、10月23日に故郷に着いた。

ウィリスは40歳になっていたが、幾多の精神的な打撃と、痛風が再発して、足をひきずりながら歩いていたという。

1881年（明治14）11月にウィリスは突然来日したが、就職口も見つからず、翌年1月アルバートだけを連れてイギリスに帰っていった。

1892年（明治27）2月14日（木曜日）に故郷フローレンス・コートに近いモーニン村の兄ジェームスの家で57歳の生涯を終えた。死因は閉塞性黄疸で、6日間肝性昏睡状態であった。

ウィリスの亡くなる6ヵ月前の明治26年8月、鹿児島でウィリスの門下生・上村泉三、鳥丸一郎、永田利紀、東清輝、森山昌則、山元文宅らが発起人となり、門下生たちや亡くなった門下生のゆかりの人々135名の寄附金を集めて、ウィリス頌徳記念碑を鹿児島市の城山に建て、高木兼寛・実吉安純・上村泉三・東清輝・鳥丸一郎・中山晋平らをはじめ23名が除幕式をあげた。

大正3年（1914）1月12日、桜島大爆発地震の際、この頌徳碑が倒れたので、翌年8月15日に門下生17名が元の位置に復旧建立した。

昭和30年春鹿児島医科大学病院が県庁西側の元私学校跡地に新築落成の前、昭和29年10月ごろウィリス頌徳記念碑を元県立病院跡の庭に移し、さらに昭和49年9月に現鹿児島大学医学部附属病院に所在する亀ヶ丘台地へ移転した。

ウィリスの子・アルバートは英国からオーストラリアに移り、明治39年4月晩の母を尋ねて来日し、横浜で劇的な再会をした。

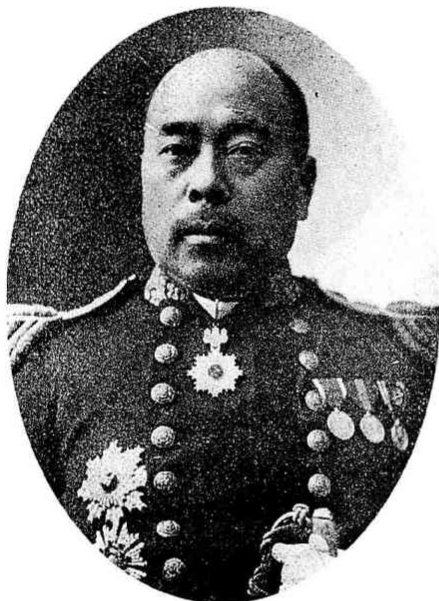
翌年8月母子揃って鹿児島を訪ねて、ウィリスの門下生たちと会い、鹿児島市磯の風景楼で盛大な歓迎会を受けた。その後、アルバートは日本に定住し、関西大学をはじめ数校の英語講師をつとめ、奈良県生駒郡富雄村に居を構え、日本女性と結婚して、2男1女の子宝に恵まれ、昭和16年（1941）に日本に帰化して宇利有平と名乗っていた。

ウィリスの妻・八重は昭和8年に東京の麻布で81年にわたる波乱の生涯を閉じた。

アルバートは昭和18年（1943）に69歳で死去した。

本日はアルバートの1人娘・河内まり代（大阪府在住）様と、アルバートの孫にあたる河内浩志（国立石川工業高専助教）様も出席しておられる。

ウィリスの門下生のうち、修業中に特に恩師思いであったといわれた数名の写真を紹介したい。



東京病院長
高木 兼寛
東京京橋区西紺屋町10番地



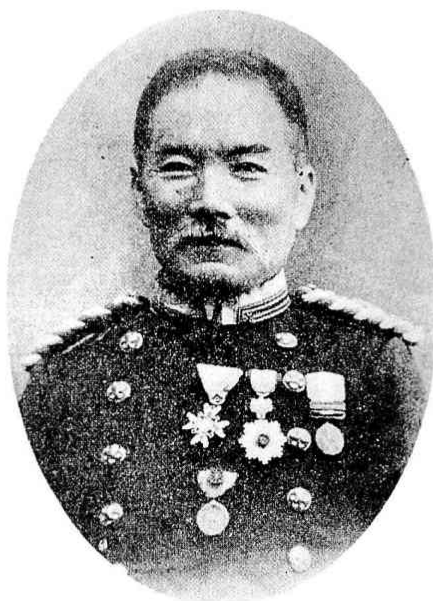
海軍軍医総監
實吉 安純
東京麻布区鳥居阪町92番地



勲五等 初代県医師会長
中山 晋平
鹿児島市大黒町95番地



外科 内科 一般
上村 泉三
鹿児島県姶良郡加治木町



従七位・勲五等
鳥丸 一郎
鹿児島市船津町166番地



内科 小児科 産婦人科
永田 利紀
鹿児島市山之口町26番地



内科 小児科 産婦人科
東 清輝
鹿児島市山之口町274番地



内科 外科 小児科
森山 昌則
鹿児島市小川町92番地



小児科
指宿 圭三
鹿児島市生産町133番地



海軍軍医総監
河村 豊洲
大分県北海部郡白杵出身



一般開業医
高城（のち寺師）慎
鹿児島県川辺郡知覧村南別府



英医ウィリアム・ウィリス没後100年記念式典・講演会
平成6年4月9日（土）14時より 鹿児島県医師会館にて
左より 河内浩志、森 重孝、河内まり代、サー・ヒュー・コータッツイ
河内まり代（アルバートの娘、ウィリスの孫にあたる）
河内浩志（河内まり代様の長男、ウィリスの曾孫）